羅振玉における「新学」と「経世」

銭　　鴎

まえがき

羅振玉（1866～1940）の名は、殷墟甲骨文字をはじめとして、敦煌写本、漢・晋木簡、内閣大庫明清資料など、20世紀中国のいわゆる四大発見のすべてと深く関わった唯一の学者として、また甲骨、銅器、石刻、陶器、明器、書画、古籍の収集家としても、広く知られている。王国維がかつて「参事夙以収藏雄海内、其天津之嘉樂里第有殷時甲骨数萬枚、古器物数千品、魏晋以降碑誌数十石、金石拓本及経籍各数万種、實三古文化学術之淵薮」（「庫書楼記」、1922年、『観堂集林』巻23）と述べたように、羅振玉の一生は文物・古籍の発見、収集、研究など、一人の人間の仕事とは信じられないほど広い範囲に及び、130種余りの著書、400種余りの公刊書を残した。

羅振玉は、明治の終わり頃（1911）日本に渡り、当時の日本の学術界とも大きな関わりをもち、また彼が日本に渡る前においても、実は明治日本の学術文化と密接な関わりがあったのである。それについて筆者はほかの論文の中ですでに検討したことがあるから、ここでは直接に触れないつもりである。この論文では、まず務農会と『農学報』(1)から書き始め、羅振玉という学者の人生を渡日前の時期まで追跡しながら、そこに清末の学術文化と社会改革の相関関係を探り、中国近代文化変容のありかたを考察してみる。

「言語文化」1-1：71－103ページ　1998.
同志社大学言語文化学会 © 銭　　鴎

第一章　務農会・『農学報』の成立の諸要素

第一節　日清戦争後における学会・新聞・訳書のブーム

1815年、イギリス宣教師 Robert Morrison がマレーシアで創刊した月刊誌『察世俗毎月統記傳』は、近代最初の中国語雑誌として知られている。続いて1827年、ポルトガル商人がマカオで発行した中文英文合巻の『依涇雑説』は、中国領土で出された最初の新聞である。また、1833年、中国大陸で出版された最初の中国語雑誌も、やはりドイツ宣教師 Charles Gützlaff が広州で發刊した『東西洋考毎月統記傳』であるという(2)。このように、中国の近代的新聞雑誌の歴史の開始は、すべて外国の宣教師あるいは商人の手によるものである。言い換えれば、近代的な新聞雑誌というものは、まず近代の西学東漸の気運に従って現れたといえよう。

アヘン戦争（1840）の後、『南京条約』などの不平等条約によって、宣教師たちの活動は南洋から香港、広州、廈門、上海、寧波へと広がり、それに従って西洋書籍の翻訳と新聞雑誌の刊行も盛んになった。1860年代、清政府の対外政策が大きく変化し、かの有名な洋務運動が勢いよく展開されることになった。新式学校、新聞雑誌及び西洋書籍の翻訳出版機構は、それまで宣教師たちの手によるものしかなかったが、60年代に入ってから中国人の手によるものも次第に現れた。そして西洋書籍の翻訳・出版も従来の教会系統の廣学会、美華書館、益智書会などのほか、中国国立、公立系統の上海江南製造局翻譯館、京師同文館などが設立された。清政府のこうした方針は西洋の学問の輸入に拍車をかけ、新しい知識と学問も次第に通商貿易港から付近の地域の基層にまで影響を及ぼしていった。これは1890年代の変法維新の運動にとっても、西学の社会的浸透にとっても、意義深いものである。

アヘン戦争以来、もはやゆっくり眠っていられなくなった中国は、日清戦争という青天の霹靂によって、やっと目醒めたのである。国家の運命に対する危機意識は、光緒帝をはじめとする統治集団から知識階層の下層にまで広

がっていく。すでに暗中模索を始めていた中国の改革は、いきなり舞台の正面に押し出されることになった。

1895年４月、『下関条約』調印の知らせが伝わってくると、当時北京での「会試」に参加していた康有為・梁啓超などは、各省からきた挙人の千三百人を集め、かの有名な「公車上書」を上奏し、「拒和」「遷都」「変法」を要求する。こうして康有為・梁啓超・厳復などを代表とする維新派は、皇帝に上奏して上から下への政治改革を図ろうとしながら、他方民間においては、新聞雑誌及び学会の創設を懸命に主張していた。同年、康有為・梁啓超らは北京で「強学会」を作り、『万国公報』、『中外記聞』などの雑誌を刊行し、また当時開明派と見られた、地方で実力をもつ大臣張之洞を説得して、上海にも「上海強学会」を発足させ、更に『強学報』を創刊し、大いに「達民隠、開民智」を主唱した。1896年８月、上海における維新運動の中で言論の主役を演ずることになった『時務報』の創刊は、その高潮を代表する。学会・新聞・雑誌に関して維新派の主張は、『時務報』の主筆を担当する梁啓超の論が最も代表的である。例えば、国事に対する新聞の重要性について、梁啓超が

> 去塞求通，厥道非一，而報館其導端也。無耳目無喉舌，是曰廢疾。今夫萬国並立，猶比鄰也；斉州以内，猶同室也。比鄰之事而吾不知，甚乃同室所為不相聞問，則有耳目而無耳目；上有所措置不能喻之民，下有所苦患不能告之君，則有喉舌而無喉舌。其有助耳目喉舌之用，而起天下之廢疾者，則報館之為也。（「論報館有利於国事」『時務報』第一冊、1896年８月９日）

と論じ、また西洋の新聞の内容と形式を「言政務者可閲官報，言地理者可閲地学報，言兵学者可閲水陸軍報，言農務者可閲農学報，言商政者可閲商會報，……」と紹介している。つまり学会にせよ新聞雑誌にせよ、その役割は則ち

情報の流通である。それによって政治的には官民間の通達（主に民の国家政治への参加を意味する）を図り、学問的には相互の刺激（主に知の新たな交流）を促すというのである。維新派にとっては、学会・新聞雑誌などの文化事業は、直接に軍事・経済などの発展には役に立たないものの、政治の刷新、国家の富強、民衆の啓蒙、知識の進歩のすべてと関わる「智」における「自強」策として考えられている。

『時務報』の提唱する「変法」「自強」の議論は、士大夫、読書人の間に多大な反響を呼び起こし、直ちに世に広がった。『万国公報』・『強学報』などは間もなく発禁されたが、維新・自強の思想は人心に染み込み、多くの人々が漸く中国の危機は「物質」ではなく、「人間」にあるのだと悟った。そして学会・新聞雑誌及び翻訳出版は、それに有効かつ重要な手段と見られるようになる。こうした気運の中で、学会の設立・新聞雑誌の刊行と翻訳出版がブームとなって全国に広まっていった。

たちまちのうちに上海は全国に於ける新しい学問の中心地となったのみならず、維新変法運動の重要な発信地ともなったのである。羅振玉が期せずして足場を上海に求め、やがて学会・雑誌を志向したのも、まずそうした時代の気運に応じて出発したものと考えられる。このような歴史的な大きな変動の時期にあたって、科挙のみしか可能性のなかった時代には想像もできないような大きな世界が、彼のような科挙に門前払いされた知識人の眼前に広がったのである。

第二節　羅振玉の「経世」・「新学」の志向とその時代

羅振玉は、少年時代から経史・考証学・古器物に対して深い興味をもっていた。19歳の年、２回目の「郷試」に合格できず、故郷の淮安で家庭教師をしながら、余暇を利用して経史・金石学・考証学を研究し、早くも『讀碑小箋』『存拙斎札稿』などの著述を著した。『存拙斎札稿』は、当時碩学として知られた兪樾によって、その『茶香室筆記』に引用されたこともある(3)。

30歳になるまで家庭教師の職に就かざるをえなかったのは、16歳の時から家庭の経済状態が悪くなったためである。しかし羅振玉は家庭教師のかたわら研究に従事するというような生き方に満足できる人物ではなかった。後年顕著になる古籍・文物に対する「傳世之志」に劣らないほどの「経世之心」を、彼は青年時代から抱いていたのである。晩年、彼は自伝『集蓼編』の中で、青年時代の自分を次のように述べている。

> 然是時年少氣盛，視天下事無不可為，恥以經生自牖，頗留意当世之故，雖處困，志不稍挫，好讀杜氏『通典』及顧氏『日知録』，間閲兵家言及防河書。（６頁）

しかし、当時の中国において、羅振玉のように科挙にも合格できず、官位を買う資金も持たない無名の青年たちは、たとえ「経綸満腹」であっても、「士」の列に加えてもらうことさえできず、つまりは「経世」の資格すら与えられなかったのである。

ところがこのような局面は、彼の30歳の頃に大きな変化のきざしがあらわれた。ちょうど30歳の時に日清戦争が終結したが、その戦争における中国の敗北は、知識階層を中心とした多くの人々に、自分がなんとかして国家の運命と関わっていきたいという「経世」の願望を強く刺激することになった。故郷でしがない家庭教師をしていた羅振玉にも、時代の新たな動きに乗じて、新たな可能性が開けてきたのである。1896年５月、彼が父に送った手紙には

> 兒自前年從事輿地時務各学，功夫未深，深恨後時……徐州地方僻甚，銅山竟設学堂，陶仲翁（陶名未詳、銅山知県）可謂知所「当務」。刻紹郡亦設学，兒前致書越中友人徐以瑟孝廉（維則）、蔡鶴頤太史（元培）等，勧其請於当道，設法開創。渠等果以兒説進紹守霍子芳，近霍太守已鳩資将集事矣，……人材日衰，皆由於不立学堂之故。（羅継祖『庭聞

憶略――回憶祖父羅振玉的一生』13頁、吉林文史出版社、1987年）

と述べている。彼は自らも「輿地」「時務」などを学び、自分と同じ思いをもつ青年達を糾合し、故郷で西学の学堂の設立、つまり新式教育の実践を企てようとしている。そのことについて、後に孫の羅継祖氏が次のように紹介している。

> 這時淮安地方上也随着時局有了新的変化，計劃開設一個西学書院，開算学・輿地・時務・外国語文四科，聘劉渭清教算学・外文，祖父教輿地・時務，原擬両教習各歳脩四百金，後以無従籌費，僅設一算学義塾，應付場面。（同上）

そもそもこの時代に於ける「経世」は、どういった課題に直面しているのであろうか。アヘン戦争のころから次第に顕在化して、日清戦争後にいっそう著しさを加えてきた植民地化によって、中国は「亡国滅種」の危機に直面していた。旧来の伝統を守るだけの「保国」は、もちろん中国を救う手だてにならない。洋務運動による軍事・工業の「近代化」の夢も日清戦争によって泡のようにはかなく消えた。そこで、中国はもっと大胆な、洋務運動の反省に裏付けられた新しい改革の構築に迫られていた。この「新しい改革」こそは、すなわちこの時代の「経世」の大きな課題にほかならない。羅振玉が故郷で西学の学堂を設立しようとした構想は、正にこうした時代の課題に即した「経世」の試みであった。

この新しい改革、すなわち「新政」としての「経世」には、それを担う人材が必要であり、その人材を育成するためには新しい学問、すなわち「新学」が必要である。羅振玉はこうした「必要」に応じてまず「新学」を志向したのである。それについて、『集蓼編』には日清戦争直後のこととして、

> 時我国兵事新挫，海内人心沸騰，予亦欲稍知外事，乃從友人借江南製造局譯本書讀之。……予窃意西人学術，未始不可資中学之助，時窃讀焉。（９頁）

と書かれている。前の手紙と合わせて、羅振玉の西洋学問への注目、そしてそれを自分の志向する「経世」の中に取り入れようとする意志は、これら二つの資料の時期から分かるように、やはり日清戦争の終結した頃から始まったと考えてよいだろう。さらに上記の手紙とほぼ同じ時に父に宛てた他の一信には、

> 浙省徐季和（致祥）宗師為守旧党之翹楚，談及西学，輒斥為用夷変夏，以前劾合肥張孝帥，皆以其崇尚西学。其不達世情如此，兒春間即往就試亦必遭斥也。（出所同上信）

と、浙江省の学使徐致祥という洋学を排斥し、時勢に通じない頑迷固陋な保守派を批判し、たとえ自分が試験（科挙）に応じたとしても排除されるに違いないだろうといっている。ここにおける羅振玉は、従来の科挙制度に反発し、西洋の学問知識を主とする「新学」や、変法・維新に憧れていた一人の青年であり、彼の中・晩年におけるイメージとはかなり異なる。

アヘン戦争の終わった頃から広まりつつあった西学は、日清戦争を機として、格段の高まりが見られるようになった。しかし、一部分の開明的士大夫及びそれに影響された読書人を除けば、その高まりは量的にも質的にも、一体どの程度までに浸透したものであったかは、まだ十分に明らかでない。例えば、『集蓼編』の上記の「乃從友人借江南製造局譯本書讀之」に続いて、「先妣斥之曰，汝曹讀聖賢書，豈尚有不足，何必是，且我幼年聞長老言五口通商事，至今憤痛，我實不願汝觀此等書也」（９頁）と述べ、西洋の学問を学ぶことは母に反対されたから、西学の訳書をひそかに読んでいたというこ

とも記されている。また、上記の彼が父に送った手紙の「近霍太守已鳩資将集事矣」の後にも、「近人談及洋人，恨之至骨，絶不知西人法制之美，学業之精，安於固陋」と、当時の一般的情況に言及している。つまり新学を志向した羅振玉は、それをこころよく思わない人々に囲まれていたことになる。そうした情況のなかにあって、羅振玉は近代に目覚めた最もはやい先覚者とはいえないものの、やはり時代の最前列に立った一人であった。

では、ここで羅振玉の思う「未始不可資中学之助」の「西人学術」は、具体的にどのような方向のものであったのか、それをさらに探求しなければならない。上に引用した自伝の記載から、羅振玉が読んだ西洋学術の訳書は江南製造局の翻訳した系統のものであることが分かる。よく知られているように、江南製造局の訳書とは、1860年代の洋務運動の中で、主に軍事工業に応じるために企てられた翻訳事業である。その翻訳の内容は、軍事工業と関わる自然科学技術の書が圧倒的な量を占め、ほかに農業・歴史地理関係のものも少量ながらある。そのことから羅振玉が関心をもった方向はおのずから明らかであろう。西洋の学問に彼がはじめて触れた時には、自然科学・農業・歴史地理関係の翻訳しかなかったのだ。また、上記の父に送った手紙にも、日清戦争の直後に「輿地」「時務」の学を学んでいたと記している。「輿地」というのは、当時にすでに紹介されつつあった西洋の地理・地誌の学を指していると推測される。「時務」は、いうまでもなく、時の現実に役に立つ学問知識や仕事のことである。つまり羅振玉が志向したのは、新しい実学としての「新学」にほかならない。

西洋との最初の出会いがこのようであったことは、彼の西洋受容のかたちを決定したとさえいえるかもしれない。以後も彼は西洋の学問、文化を全体として理解することはついになく、実学としての面しか受け入れなかった。中国の学問に対しては伝統の総体を受容した彼にとって、西洋の学問は中国と同等にはなりえないものだったのである。

羅振玉が故郷の淮安で西学学校を設立しようとした構想は、結果としては

経費の問題のために実現することができなかった。しかし実学としての「新学」を以て近代的な知識の啓蒙を図ろうとする「経世」志向は、明確な意志として彼のなかに根付き、実現のための別の機会を待つことになる。

第三節　維新運動における農業近代化の要求

ひたすら軍事・工業の近代化を強調した洋務運動に比べて、維新運動期の「富強」策は、もっと幅広い範囲にまで及んでいた。そこでは農業近代化の課題も検討にのぼってきたのである。例えば、康有為の「上清帝第二書」（1895年）では、農業に対してもかなり重視している。

> 養民之法，一曰務農，二曰勧工，三曰恵商，四曰恤窮。天下百物皆出于農，……外国講求樹藝，城邑聚落，皆有農学会……吾地大物博，但講之未至。宜命使者擇其農書，遍於城鎮設為農會，督以農官，農人力薄，国家助之。

ここに表れている農業重視は、伝統的な農業を「本」と見る発想だけではなく、西洋の先進的農業科学技術の吸収によって中国農業の近代化を図ろうとしたもので、つまり農業を維新変法・近代化改革の一環とみなしているのである。維新運動のもう一人の思想的リーダー梁啓超も、「西書提要農学總叙」（『時務報』第七冊、1896年10月）を草し、

> 今之譚治国者，多言強而寡言富。即言富国者，亦多言商而寡言農。舍本而圖末，無惑乎日即於貧，日即於弱也。西人言農学者，国家有農政院，民間有農学会，農家之言，漢牛充棟。中国悉無譯本，祇有『農学新法』一書，不及三千言，……

と、大いに欧米の農学書籍を翻訳し、欧米の先進的農業技術を導入すること

によって、中国の農業を振興しようと主張している。ここに明らかに述べられているように、維新派が農業振興を唱えているのは、中国と違って西洋においては農業がはなはだ活発であることに刺激を受けたのである。そしてその西洋に関する情報は、先に述べたように教会を中心に盛んに発行されていた雑誌を通して得られたものであった。ここから西洋人の刊行物が中国の近代化に与えた力を知ることができる。それは日清戦争に敗北したことがもたらした刺激と相並ぶ、重要な影響を与えたのである。

維新運動の農業近代化の主張は、当時「新学」「新政」に憧れていた青年羅振玉が農学の啓蒙事業に身を投じるのにも、大きな影響を与えたに違いない。

しかしながら、羅振玉は晩年に書いた自伝『集蓼編』の中で、

> 予既至上海，見士夫過滬江者，無不鼓掌談天下事，而時務報専以啓民智伸民権為主旨。予與伯斧私議，此種議論，異日於国為利為害，是未可知。且当時所謂志士者，多浮華少實，顧過滬時，無不署名於農社以去，是宜稍遠之。　　（９頁）

と、上海時代に維新思想、維新派たちに対して自分が如何に対立的な感情をもっていたか、しきりに強調している。確かに時間の推移につれ、彼と維新思想との差異は次第に明らかになるのであるが、しかし日清戦争の直後の、変法維新の気運が高まっていった時期において、実際の羅振玉は『集蓼編』の中に描かれた自画像とはかなり異なる「時務」青年であった。その最大の証明は、彼が故郷を離れ、新学を求めて上海に向かい、当時の維新事業に参加したことである。羅振玉のこのような姿は、その時父に送った手紙の中の「穰卿與兒旧交、所著『時務報』切中時弊、為中国最佳之報紙、留心時事者必不可不讀」（羅継祖の前掲書14頁）という一段にも反映しているし、また当時上海の『時務報』総理の汪康年に宛てた手紙からも、その一斑を窺うこ

とができる。

> 竊以中国千餘年之積習，皆坐人心錮蔽，才智不出。今欲開錮閉，則興学校為要圖，而開学校之先聲，則報館為尤急。竊以閣下此挙實握開風氣之樞紐，為之驚喜欲狂。比報張出，得讀偉論，暨梁卓如先生諸議，辭理併優，三長兼擅，沈痛深摯，語語中肯，奇才奇才，能毌拜服。弟流庸淮浦，録録無寸長，行年三十，精力半耗於經史考據之中，比来憬然有悟，已有遅暮之慨。……昨與敝友蒋伯斧参軍議中国百事皆非措大力所能為，惟振興農学事，則中人之産，便可試行。……（『汪康年師友書札』３、3152頁、上海古籍出版社、1987年）

つまり、故郷で家庭教師をしていた羅振玉は、高揚していく維新運動に鼓舞され、当時の「啓民智」「興実学」「訳書」「設学会」などの変法自強の主張に共感し、それまで続けてきた経学や史学などの古い学問とはまったく性格の異なる方向へ歩み出そうとしていたのである。このように見てくれば、後年の羅振玉がみずからを語ったのとはまったく違う、やはり時代の子としての青年羅振玉の姿が浮かび上がってくる。

第四節　羅振玉にとっての農業

農学に志向することについて、『集蓼編』では次のように記述している。

> 予少時不自知其譾劣，抱用世之志，繼思若世不我用，宜立一業，以資事畜。念農為邦本，古人不仕則農，於是有学稼之志，……又讀欧人農書譯本，謂新法可増収穫，恨其言不詳，乃與亡友蒋君伯斧協商，於上海創学農社，購欧美日本農書，移譯以資考究。（９頁）

ここでは、自分が農学に身を投じたことには、「農為邦本」を具体的内容

とする「用世之志」と、「欧人農書譯本」に代表される「新学」の啓蒙、それに加えて「宜立一業、以資事畜」という考えも、その契機の一つになったことが語られている。かつて羅繼祖氏が、祖父の農学志向に就いて次のように説明したことがある。

> 祖父又念「農為邦本」的古訓，中国以農業立国，農業不振是国家貧弱的主因。……這是為国家打算；又念古人「不仕則農」，自己於科挙已經絶望，為了仰事俯畜，也要找一個進身之路，這是為自己打算。（羅継祖前掲書第13頁）

つまり、羅振玉の農学志向の中には、国家のためと個人のためという二層構造が明らかに存在していたのである。

羅振玉16才の時から家の経済は父の質屋経営が破産して膨大な債務を負い、特に父が亡くなってから、羅振玉は多病且つ無能の兄の代わりにその家の家計の責任を背負わなければならなくなった。一族の生計を立てるためにも、科挙の道が絶たれた自分のためにも、「事畜に資すべき」一業を立てる必要があった。彼の「経世」の志にせよ、「新学」の志向にせよ、彼の志す「事業」は、同時に経済的な益ももたらす「職業」でなければならなかったのである。

職業とする事業には、当時他の人々の手によって行われていたように鉱山を開く、銀行を興す、鉄道を敷設するなど、さまざまな道がありえた。しかしそれらには膨大な資本が必要となる。学校開設ですら、羅振玉は経済的理由のために断念せざるをえなかったのである。その点、農業は他の実業ほどに大きな利益を得ることは望めないにせよ、彼のような条件にあった人にとって、現実的に可能なことであった。羅振玉自身、そのことは先の手紙（第三節）のなかで述べていた。「農業を振興する」ことなら、「中人之産」にも実行できたのである。

かつて（1896年）、同郷の劉鶚が、自分が山西巡撫に謀り、山西に外資で鉄道を敷かせて、30年後に国有に帰せんと計画していることを書いて、羅振玉に手紙を送ったことがある。それに対して、羅振玉は「君請開晋鉄，所以謀国者則是矣，而自謀則疏。万一幸成，而萋菲日集，利在国，害在君也，君不之審於是。事成，而君漢奸之名，大噪於世」（『五十日夢痕録』、『羅雪堂先生全集』３編20、8438頁）と述べ、「利は国にあり、害は君にあり」とはっきり判断を下している。当人のためにならぬというのである。ここからも一斑を窺えるように、羅振玉は、同じ「時務」・「新政」の業を興すとしても、決して机上の空論を唱えるような、現実感覚のない人間ではなかった。

また、日清戦争の直後に確かに維新変法の声は一時期言論界をリードし、朝野を沸かしていたものの、同時に帝党后党の闘争が裏で激しく進み、保守派の反抗も強いものであった。康有為・梁啓超などが発起した北京強学会・『万国公報』・『中外記聞』・上海『強学報』などは次々と閉鎖され、変法を唱える官吏も続々弾劾され、官を剥奪されたという情報があちこちで流されていた。中国の政治状況を熟知していたであろう羅振玉が、自分の行動に慎重でなかったはずはない。彼が言論界・学界においてほかでもなく農学を専門とすることを決め、しかも『農学報』に「以明農為主」「不及他事」、また「並無論説」といい、もし論議があっても「必有關農学者」と、専門分野に限定することを強調していることも、上述の「自ら謀る」ことと決して無関係ではなかろう。農業振興は政治的に「安全」な道だったのである。

このように羅振玉が農業振興に歩みだしたことは、実学、ことに農業の重視という当時の全体的な気運、そして彼自身においては「新学」「新政」への意欲、そして経済的に着手可能であり且つ生計を立てることもでき、さらにそれによって名を挙げることも可能になるといった、様々な要因が働いた結果であった。羅振玉が農学雑誌発刊に踏み切ったのは、決して偶然の結果ではなかったのである。

第二章　『農学報』の創刊とその影響

第一節　務農会と『農学報』の開始

羅振玉らが汪康年に上記の手紙を出した約１ヶ月後の1896年の冬、務農会は汪氏の様々な協力を受け、『時務報』（第13冊、1896年12月５日）に最初の広告――「務農会公啓」を掲載し、その運営を開始した。「務農会公啓」には、まず秦漢以来農学は講じらることがなく、農業不振の深刻な状態を述べ、続いて現在に至っても「近年西学大興、有志之士鋭意工商諸政、而於農学絶不購求」という偏った近代化方向に不満を表して、自ら「創設務農会以開風気、以濬利源」との志向を明らかにしている。

それに続いて、「簡要章程」10条を発表する。その「簡要章程」によれば、務農会の最初の意図は、外国の機械農具を購入し、技師を招き、江浙両省で農田を購入して実験農業を試みることが主であって、毎年収入の余裕ができたら農書を翻訳し、『農学報』を刊行することになっている。しかし、この「務農会公啓」を掲載した翌年４月の『時務報』（第22冊、1897年４月２日）に、また「農会報館略例」を公表した。その中に、

> 蒙等召集同志創設務農会，本擬開会以後再行設立報館，惟現在經費未集，同志未多，曠日持久，殊非善策。茲擬先設農会報章，以通消息，以廣見聞，一俟同志日多，款項稍裕，然後詳訂会中章程，定期開辦。

と、最初の方針が改められている。つまり経費と技術の困難が克服できなかったために、もともと先行するはずだった務農会の定期的な開会と実験農業の実行は、結局『農学報』の刊行に先を譲ることになった。その経緯について、羅振玉の汪康年宛の手紙には次のように書かれている。

> 今此会欲挙行，誠如尊諭所謂經費難籌及無以取信両端。鄙意莫如先譯

書報，……計一歳之需，不過両千金左右，当可敷衍。書報既出，消息可通，我輩今日所諮詢於人而各執一詞者，異日可自於所譯書中得之，……冬月廿五日巳刻。（1896年と推測、『汪康年師友書札』3154頁）

つまり羅振玉は、まず農業関係の雑誌を起こし、外国の農書を訳し、各国及び国内各地の農務情報を伝えるといった、知識の啓蒙教育から始めようと提言したのである。上の提案直後の1897年３月、羅振玉・蒋黼らが農書の購入、日本語・英語・フランス語の翻訳担当などの準備を整え、相次いで上海へ向かって出発した(4)。

羅振玉・蒋黼が上海に着いた翌月、前記の「農会報館略例」を『時務報』に公表した。その「略例」の中には、次のような四条の「刊報凡例」がある。

一、本報之設，以明農為主，兼及蠶桑畜牧，不及他事。
二、本報用第三号字模，毎月刊報両次，装訂成冊，毎次約三十頁。
三、本報専譯東西農学各報及各種農書。将来開会以後，詳載本会辦事情形，如報章日多，即添人専譯農書，不附報後，以期出書迅速。
四、本報並無論説，如海内同志以撰述見教者（必有關農学者），当擇尤録登，以備衆覧。

その後また「籌款章程」に「本会銀銭出入統由汪君穰卿主政、凡諸君助款請逕寄本館、由本館填給本会収条、並送請汪君籤字、以昭憑信」の一条が載る。それによって、少なくとも次のいくつかの点が確認できる。第一、『農学報』は創刊当初から専ら農業を研究する純粋な農学専門誌を志向すること。第二、雑誌の内容に関してはもとより翻訳を中心とする穏健な方針をとること。第三、『時務報』の信用と販売ルートを大いに利用すること。

務農会・『農学報』の開始時期における羅振玉は、交遊も経験も乏しい、無名の田舎青年である。彼が上海の新聞界・学界に足場を築くために、同志

の糾合、資金の調達、外国情報源の保有、翻訳者の招聘、地方上層官僚の支持の獲得などを行うには、すべて汪康年を中心とする『時務報』グループに負わなければならなかった(5)。のみならず、務農会・『農学報』が西洋近代の先進的な農業科学と技術を導入し、中国農業の近代化を図ろうとする理念は、『時務報』の変法維新の精神と共通するものであり、康有為・梁啓超などが主張していた農学振興の全体的な方向とも合致する。『農学報』第一冊の冒頭に置かれた梁啓超の「序」に、『農学報』の創刊を「在開廣風氣、維新耳目、譯書印報、實為権輿」と述べているところにも、それは明らかである。務農会が最初に発布したあらゆる原稿はすべて『時務報』によって公表され、しかもそれには度々汪康年の支持的なコメントが附されていたのである。それについては、すでに大川俊隆氏が指摘しているとおりである。「それよりもやはり羅氏達が、自分達の農学と農業の振興事業を、『時務報』が進めていた変法自強運動の一環としてとらえていたからであろうと推察される。汪氏もそのようにとらえたからこそ、自誌を通じての全面的バック・アップ体制をとったのであろう。」（注(1)参照）。

かくして1897年５月、羅振玉・蒋黼が発起人となって、汪康年など『時務報』グループの強い協力を受け、中国における最初の農学専門誌――『農学報』が、上海で誕生することになった。

第二節　『農学報』の反響

『農学報』は、諸外国、とりわけ日本の農業関係の書籍の翻訳と、農業に関する制度、教育及び農業技術の紹介を主な内容とし、また国内の農政に関する諭旨、上奏、及び各地の農事情況の紹介もしていた。『農学報』の形式は大体『時務報』と同じであるが、ただ内容は農業分野に厳しく限定し、時事政治を一切議論しない、つまり『時務報』と違って一定のイデオロギーの主張を含まない。論説を押さえて、翻訳を中心とした、専門性・知識性の強い雑誌であった。この点においても、羅振玉の見識が窺われよう。このよう

な或る一つの専門分野だけに限定した雑誌は、当時の中国にはほかになかった。

務農会の発足、『農学報』の発刊は、たちまちのうちに各界の反響を呼び起こしたようだ。1896年12月「務農会公啓」が公表された当初、そこに名を連ねていたのは羅振玉・蒋黼・徐樹蘭・朱祖栄の４人しかなく、出資者として挙げられているのも羅振玉・蒋黼の２人にすぎなかった。1897年４月「農会報館略例」が掲載された際、また４人の出資者が増えた。以後、『農学報』の「農會題名」「続題名」(6)によると、務農会の会員・出資者は三百人あまりに達した。そこに見える務農会の会員には、汪康年・梁啓超・譚嗣同・黄遵憲などの維新派のほか、洋務派官僚を代表する人物李鴻章・馬建忠、また洋学に通ずる名士の徐維則・馬良、旧学碩儒の沈曽植・繆荃孫なども入っている。更に両湖総督の張之洞・湖南巡撫の陳宝箴など地方の実力派大臣の名も続々と見えるようになった。このように幅広く政見・系統・学派の異なる代表的な人物を見事に糾合した民間の学会は、新聞・学会がはなはだ興隆していた当時においても、ほかに例を見ない存在であった。

一方では、このような支持層を確保することによって、『農学報』の販売量は、『時務報』には比べられないものの、徐々に伸びていった。一般の読者のほか、長江中・下流を中心とした各府・県の地方官僚による公費購入の命令も次第に多くなった。例えば、『農学報』第五冊（1987年７月）に「杭州府林太守飭各属購閲農学報並分給各書院札」という記事があり、その中に

> 茲『時務報』外，又新出『農学報』，討論農田水利，樹藝牧畜，兼取古今中外良法，最為切實有用。西人之講礦学，費鉅而事難，非有大力不辦，不若農学一門，各郷各鎮，可以挙行。……按月報出，由府封寄，……此外該県各書院各紳士，並各郷分講善書之処，均勧令廣閲，期以裨補地方。

と述べ、所属地方・機関に購入及び閲覧を命じていた。また両湖総督張之洞も

> 又上海『農学報』，大率皆教人務農養人之法，於土性・物質・種植・畜牧……確有實用。其一有裨士林，其一有關民生，均為方今切要。（「両湖督院張咨会鄂撫通飭各属購閲湘学報農学報公牘」、『農学報』第12冊、1897年10月）

と評価している。ほかにも両江総督の劉坤一など、同じ趣意の「購閲」訓令が多く出されている。

また、当時の士大夫・知識人の残した日記や書簡などに度々『農学報』の名が見えるのも、一般読者への浸透ぶりを示している。例えば、鄒代鈞の汪康年宛ての書簡に、

> 『農学會報』二十一冊都収到，回郷後即可代銷。此報甚好，所譯極佳。祈為我致意蔣、羅両君，容緩即覆書也。……初十（五月十四到）（新暦1898年６月28日、『汪康年師友書札』2732頁）

と賞賛している。また、葉瀚の汪康年に送った手紙にも「聞古城帯到農学書甚多、乞示細目、想是農学会所置譯者、此盛業也。」（同上2587頁）と書かれ、翟性深の汪氏に宛てた手紙に「今晨鐘春翁（善後局委員）邀弟前去，嘱将管派『農学報』添發四百四十三分，是以特函上達。」と、『農学報』の増購を羅振玉・蔣黼に伝えるよう汪康年に依頼している。

ここまでの記述からも分かるように、『農学報』は創刊後ほどなく、長江の中下流を中心とした地域において、かなりの反響を呼び起こしていたに違いない。

第三節　『農学報』と「百日維新」

1897年、張謇が朝廷に農業・農学を振興する趣意の上奏文を呈し、その中に羅振玉らの務農会、『農学報』のことを、「中国有志農学者、頗不乏人、近日上海設立農学会、専譯東西洋農法農書、未始非中国農政大興之兆。」（「請興農会奏」、『張季子九録・實業録』巻１、５～７頁）と誉め称えていた。今まで知っている限りでは、これは務農会・『農学報』のことが朝廷への上奏で言及された最初の例だと推測される。

1898年６月11日（光緒24年４月23日）、光緒皇帝が「詔定国是」の詔書を下し、「百日維新」が始まった。６月20日（旧暦五月初二日）、御史の曽宗彦が張謇に続いて、更に務農会の例を挙げて農業の振興と農学購求の奨励を光緒帝に向かって、次のように奏した。

> 查江浙紳士，邀集同志於上海創設農学会，兼採中西各法，以樹藝畜牧，倡導海内，在興利之中，最有實際，毫無流弊，行之一年，尚稍稍有應之者。惟以二三人士，主持其間，志願無窮，而功力有限，極漸擴充，則曠日難俟，始勤終怠，則或廢半途。非得明詔鼓舞，藉以風動四海，区々一農学会，亦恐徒労鮮功，無益大計，……乞明降諭旨，将上海農学会，亟予激励，或飭地方官，力為保護，或恩賞銀両，不論多寡，以示特施。（「掌江南道監察御史曽宗彦摺」、『戊戌変法档案史料』、中華書局、1958年、386頁）

それに対して、総理衙門が、検討を経たうえで、７月４日（旧暦５月16日）、次のように光緒皇帝に転呈した。

> 所称上海農学会，由江浙紳士創設，行之有効，是風氣業已漸開。惟該学会何人經理，一切章程未經呈報，無案可稽。應請旨飭下南洋大臣，查明該紳等姓名，及該会章程，咨送臣衙門備覈。（「總理各国事務奕劻

等摺」、同上、388頁）

その時、変法にある程度の熱意をもっていた光緒帝は、この上奏文を見て、頗る関心を示し、その日のうちに回諭を下した。

> 農務為富国根本，亟宜振興，……上海近日創設農学会，頗開風氣，著劉坤一查明該学会章程，咨送總理各国事務衙門查覈頒行。其外洋農学諸書，並著各省学堂廣為編譯，以資肄習。（光緒24年５月16日、『農学報』37冊「上諭五月十六日」；『大清徳宗景皇帝實録』（六）巻420、3827頁、台湾華文書局）

朝廷・皇帝の注目を受けたことは、羅振玉にとって、言うまでもなく大きな励みとなったであろう。彼がその時父に宛てた手紙には、「農会於上月奉到南洋傳諭，索取会章，欲頒行各省，中国農事轉機将在於是，不僅草野小臣，私衷欣慰也」（羅継祖前掲書17頁）と、欣喜の情があふれ出ている。

1898年８月21日（旧暦７月５日）、康有為の提議が採納され、農工商総局が開設されるようになった。従って、羅振玉らの務農会及び『農学報』の経験は、ごく自然のうちに、新しく設立された農工商総局の身近なモデルになったのである。新設された農工商総局の計画には、農務学校、農学総会、農学官報の設立や外国の農業機械の購入・外国の技師の招聘・耕種の実験などといった、ほとんど羅振玉らの務農会が出した一連の章程に書かれた内容である。これは、「百日維新」期間に督理農工商総局大臣である端方をはじめとする一連の上奏から窺われる。例えば、「開農学官報」一項においても、

> 上海前已設有農報，創展風氣，獨具匠心。茲開農学官報，意在與上海農報館相輔而行。該館獨力經営，備極艱苦，並当力加保護，且可借鏡得失，互相觀摩。（「督理農工商總局大臣端方等摺」、光緒24年７月19日、

『戊戌変法档案史料』、中華書局、1958年、391頁）

と、明らかに計画中の官報が、「創展風氣」の羅振玉らの『農学報』と「借鏡得失、互相觀摩」せよとの意を示している。このことについて、『集蓼編』にはさらに

> 方戊戌新政挙行，浭陽端忠敏公，任農工商大臣，鋭意興農，移書問下手方法，予謂欲興全国農業，当自畿輔始，……因寄畿輔水利書，附以長函，公閲之欣然，乃先議墾張家湾荒地，（11頁）

と記されている。それと農工商総局開設当初における端方の一連の上奏とあわせてみると、新しく農工商総局の「大臣」になった、しかし農学に全く素人の端方は、その運営企画を羅振玉に負うところが少なくなかったことは想像に難くない。

これまで見てきたように、務農会及び『農学報』は、まず維新運動の一環として発足し、やがて科学技術の発展につれて農業近代化の重要性も広く認識されていった歴史的背景のなかで、成長していったのである。「百日維新」の行われた時期に、務農会と『農学報』は一気に頭角を現し、羅振玉は近代農学を切り開く先駆者として名を朝野に広く知られていく。これは後に彼の前に仕途の門が開く契機にもなったのである。1900年、羅振玉は張之洞の招聘に応じて湖北農務局総理兼農務学堂監督の任に就いた。更に1907年、清政府の留学生の選考に当たって、当時すでに體仁閣大学士・軍機大臣・学部の主管の任にあった張之洞によって選考官に推薦され、農科及び各科の国文の試験の採点をしたという（羅継祖『永豊郷人行年録（羅振玉年譜）』32頁、江蘇人民出版社、1980年）。1909年、中国の最初の農科大学――京師大学堂農科大学が北京に設立された際、羅振玉は恰も当然のように、あっさりとその初代の監督（学長）になった。地方の一「秀才」にすぎなかった無名の青

年が、変動の時流の波に乗ったかのように、一気に駆け上がり、近代農学界の第一人者として名実ともにその地位を確立したのである。

第三章　羅振玉の早期活動に対する評価をめぐって

羅振玉の『農学報』を基礎とした農業科学技術の啓蒙における功績は、当時においてその実績が認められたのみならず、中国農学史または農業科学技術史においても、ことにこの十数年間において、大いに評価されるようになった。

農学の領域においてのみならず、20世紀中国の四大発見（甲骨文、敦煌学、漢晋木簡、大庫明清資料）それぞれにおける羅振玉の偉大な業績が高く評価されている。ところが奇妙なことに、その総体であるところの羅振玉自身については、いまだに評価はかんばしくない。かくも広い分野にまたがってそのいずれにおいても高く評価されながら、彼自身は評価されないというのは、どういうことなのか。それには、羅振玉という人の人格、人間性に問題があるためだろうか。しかしながら、その人となりのいかんによって、学術史、文化史における評価を決定してしまうというのは、正しい態度とは思われない。彼の生涯になした多くの仕事を綿密に検討し、その内容・意義・事実関係を明らかにし、内部と外部における全体関係を十分に理解することは、学術史そのものの解明にとって必要なことではないか。各分野における成果は、羅振玉という人間あっての達成であり、羅振玉の全体を対象としてこそ、それぞれの分野における意義も理解できるはずだ。

一方でまた、従来の近代史研究においては、維新派 ・洋務派・保守派といった「派」を単純に図式化しすぎたきらいがある。その判断基準のもとになっているのは、現在における価値体系を唯一の価値として絶対化する態度である。「近代」の目からみて、近代のみが絶対の価値であり、近代に合わない要素は否定される。それが単純に過ぎる図式化をうながした。具体的にいえば、中国は西洋の近代をいかに受け入れたか、それのみが追跡されてき

た。しかしこうした従来の基準で中国の近代化の本質を捉えきることができるだろうか。少なくとも、いわゆる革命派・維新派でもなく、保守派・頑固派ともいいきれない、つまりは「図式」に収まらない、しかしともかく近代的改革を現実に遂行していた張之洞から羅振玉に至る人々は、評価の目からこぼれ落ちてしまうことになる。たとえば張之洞は梁啓超・孫文とは異なるもう一つの近代のありかた、中国の基本的な伝統を生かしながら西洋を受容していこうという方向を意図していたが、そうした考え方は従来の近代史研究においては十分には評価されていない。羅振玉の複雑な思考体系も近代絶対化の視点では捉えにくいものであった。羅振玉は幼い頃から、中国の正統的伝統教育を受け、「経史」の学を学んだ世代であった。しかし、彼は新しい時代に眼を向け、世の中の変化を鋭敏にとらえて、諸外国の学問、思想及び技術を取り入れ、精力的に教育の近代化、農業の近代化を図った。のみならず、彼の「経史」の学問は、「新古典学」と呼ばれるように、学問の近代化を内的に実現したものであった。例えば、殷墟甲骨及び内閣大庫史料の発見、保存、研究は、史学の新たな視点ともっとも深く関わっている。このように、教育などの近代化をめざし、学問の新しい潮流を切り開いたにもかかわらず、彼は革命にあくまで反対し、最後まで君主制を擁護しつづけた。羅振玉の世代が経験した近代に対して、それが進歩か保守か判断する根拠を我々は今日まだ見出していないのである。新と旧、西洋と東洋両者の価値とその変容を相互の関連のもとに同時に展望しない限り、中国近代の真の姿を解明することはむずかしく、ひいては東洋近代のほんとうの歴史的意味も理解できないのではなかろうか。さらには近代に続く次の文明発展のあるべき姿を構築することもできるとは思われない。これは中国近代化の研究に課せられた大きな問題である。

第一節　「百日維新」・「戊戌政変」を経て

『農学報』の発刊当初は、以上のような大きな反響を呼んだのだが、政治

状況のめまぐるしい変化は安穏な日々を与えはしなかった。政変の影響がここにも及んだのである。

「百日維新」は文字通り、はなはだ短いものであった。続いて起こった「戊戌政変」によって、維新派のリーダは虐殺されたり、海外に亡命したり、官を奪われたりしただけではなく、維新運動に同情した中央から地方までの多くの官吏も連座した。政変の後、政府が学会・新聞雑誌の設立に対して禁止令を下し、日清戦争後に雨後の竹の子のようにあらわれてきた各種の学会・新聞雑誌は、やがて閉鎖されたり、自ら解散したりするような結末を余儀なくされた。そのことについては、『集蓼編』の中でも「方是時朝旨禁学会、封報館、海上志士、一時雲散」と言及されている。『農学報』は閉鎖されなかったものの、やはりそうした情況の中で衝撃と動揺を経験することになる。政変後の『農学報』の処置について、『集蓼編』には次のように書かれている。

> 農報未經查封，予與伯斧商所以處之，伯斧主自行閉館散会，然是時館中欠印書資，不可閉。予乃具牘呈江督，請将報館移交農工商局，改由官辦，並託亡友儀徴李鶴儕大令（智儔）面陳劉忠誠公。公曰，農報不干政治，有益民生，不在封閉之列，至農社雖有乱党名，然既為学会，来者自不能拒，亦不必解散。……大令為言，雖制軍意在保全，奈財力不継何，忠誠乃親批牘尾，令上海道撥款維持，滬道發二千元。（10頁）

『農学報』は閉鎖されなかったが、その発起人の一人の蒋黼が、「感於時危」（上記の引用文）のためであろうが、自ら解散すると主張した。しかし印刷費の借金がまだ残っているため、羅振玉が両江総督の劉坤一に『農学報』を官辦に引き渡したいという申し出をした。劉坤一は、『農学報』創刊の当年に所属の地方に「購閲」の命令を発しており、「百日維新」の時、務農会の章程・状況を調査して朝廷に報じるよう光緒帝に命じられた人である。彼は

張之洞と共にそれぞれ両江・両湖を統領する実力派地方大臣で、しかも一般的には張之洞よりずっと頑固な保守派と見られている。この劉坤一は、羅振玉に対して「政治に干せず、民生に有益、封閉の列に在らず」と『農学報』の性質を規定しただけでなく、補助金交付の令も下した。羅振玉が最初に掲げた「政治に関与しない」方針が、この時になって功を奏したのである。また劉坤一が農工商鉱などの学校設立に関する件を上奏した時、「更就上海之農学報館改為農務總会、由臣另籌款項、重訂章程、與各省聯絡協助、」(「両江總督奏立農工商礦各学堂片」、『農学報』49、1898年11月)と述べ、自分の指導する範疇の中に納めようともしていた。『農学報』はこういう厚遇を受けて、まず政変後の第一の難関をなんとか無事に通過することができたといえよう。これについて、当時羅振玉が汪康年に送った手紙にも「農報館得峴帥之款、可以卒歳、可以支柱大局、弟無東顧之憂」(『汪康年師友書札』3159頁)と書いている。

政変後の混乱と危険を避けるためでもあろうか、この年の12月(旧暦)、羅振玉は故郷の淮安に帰省した。しかし汪康年に送った手紙の中に「弟昨在舟中、擬整頓報館章程、寄已公乞為裁奪」(同上書簡)ということなどから、政変後も『農学報』を改めて整備して、刊行を続けていこうとする意志が明らかである。しかし翌年の春、淮安から上海に戻ると、劉坤一の命によって受けた2000元の補助金で印刷費などの借金を返したが、ほかには一銭も残らず、また最初のもう一人の発起人、蔣黼が退会して故郷に帰ってしまったり、会員たちも「雲散」するという麻痺的な局面に瀕していた。その時、江寧鐘山書院を主事している繆荃孫が年収600元で羅振玉を招き(7)、また端方が陝西省に転任する際にも彼を誘ったことがある(8)。しかし羅振玉は当時、汪康年に宛てた手紙に次のように書いている。

> 刻下又当絶續之交，弟不能至寧(繆荃孫の招聘を指す)，半月後，仍須至滬料理，若弟赴高等之招，則此局休矣。今年農会處萬難之勢，仍須

努力，存此孤注，是私衷耿耿者耳，公以為如何？（『汪康年師友書札』3163頁）

多くの同志が出資していた『農学報』館は、羅振玉のこうした努力で持続させることはできたものの、ついに彼一人の資金によって彼一人が経営することになってしまったのである。羅振玉の『農学報』に対する整備策の一つとして、まず張之洞湖北農務局の章程を援用して農学会章程を改め、善後局によって各省に『農学報』の購閲令を発してほしいと張之洞に要請し、張も応じていたようである(9)。次にもう一つの整備対策は、これまで『農学報』館が翻訳した農学関係の書物を集め、叢書に編集して百部を印刷する計画であった(10)。ちょうどその時、張之洞が羅振玉を湖北農務局の総理の任に招いていた(11)。

その時に編集出版した農学叢書は、「所印農書，亦未請文襄札發，而銷行甚暢，所得利益，除償本金及維持農館・東文学社外，尚贏数千圓」（『集蓼編』15頁）と、かなりの成功を収めたようである。更にこの『農学叢書』は、1904年、端方の推薦によって光緒帝の手元にも上呈されたのである（「進呈農学書籍摺」、『端忠敏公奏稿』巻４による）。

これまで見てきたように、戊戌政変の後、かつて務農会・『農学報』が追随していた、或いは仲間としていた多くの維新派人士と同仁事業は、もちろん汪康年の『昌言報』（則ち前の『時務報』）も含め、ほとんど壊滅状態に陥った。ところが、維新運動の高揚期に維新派の力に頼り、彼らとあれこれ関係を持った羅振玉、そして『農学報』は、そのあとに起こった政変の険悪な状態をなんなく抜け出しただけではなく、政変後の新たな体制ともあっさりと手を結び、その近代農学界の第一人者としての地位を、体制の変転にかかわらず継続し、更に定着させることができた。

「百日維新」と「戊戌政変」という対極的な価値表現において、羅振玉と『農学報』のこのようなあり方は、一見奇妙であるかもしれない。これにつ

いて、一般的な見方では、羅振玉の興した務農会と『農学報』の近代啓蒙の意義を認めてはいるが、政変後にも継続したことに対してほとんど理解されず、それは保守派の陣営に投降したとか、或いは維新から保守に「転身」したなどと評されている。例えば、前掲の大川俊隆氏の「上海時代の羅振玉――『農学報』を中心として――」の中で、「羅氏は、維新派の弾圧にあたった保守派の劉坤一から資金援助を得たのである。これは羅氏が、維新派の一翼から離れて、保守派の翼下に入ったことを意味するはづである。……私はこの時点において、羅氏の「転身」があったことを指摘しておきたい。」と述べている。

しかしながら、ほんとうに羅振玉は、政変の中でその険悪な政治情勢を見て保守の陣営に身を投じたのか、或いはもともと羅振玉は保守派に帰属すべき人であったのか。もし政変の危急を免れるために転身したのだとするならば、政変後に転身を行ったのでは遅すぎるのではないか。或いはまた、もともと保守派に帰属していたとすれば、務農会と『農学報』の図っていた近代学問としての農学は、真の近代啓蒙とはなりえないのではないか。維新言論の代表としての『時務報』グループを含めた一連の維新事業との関係が説明できなくなる。

この難解な問題について、ここでは次のように一応の答を記しておこうと思う。務農会発足の当初、羅振玉が掲げたのは、「万世之本」、「当務之急」、「近代的学問」であった。これは維新か保守かといった二項対立とは別の次元に属するのではないか。それゆえに保守派からは「民生之実」といわれ、維新派からは「開風気」といわれたように、両派のいずれからも支持されうる性格を本来もっていたのである。政治的立場の表明を初めから排除したことと併せて、こうした務農会の性格が、政治状況の変化をするりとくぐり抜ける結果となったのではなかろうか。

第二節　上海時代の交遊と金石学

ここでは話を転じて、羅振玉の上海時代における金石学の面をいささか記しておこう。

いうまでもなく、羅振玉の金石・経史考証学の愛好は乾嘉の学術伝統及び清朝金石学復興の気運のなかで育てられていったものである。また当時科挙試験の実権を握っていた清流派の学風（公羊学、金石学、地理学）とも決して無関係ではない(12)。羅振玉の金石・経史考証学の愛好、そして碑版、印璽、鏡鑑などに対する強い関心は、最初にも触れたように少年時代から早くも始まっていた。ただ生計が苦しいため、古碑版などを買う余裕はなく、旅商人からそれらを借りて読みながら、考証を加え、19歳の時、それらをまとめて「讀碑小箋」を著したのである。その後さらに「存拙斎札疏」、「淮陰金石僅存録」、「金石萃編校字記」などが次々と書かれた。

しかし家の経済状況がなかなか好転しなかったために、少年時代の羅振玉の金石・経史考証学に対する愛好は、十分に果たされなかった。生計を立てるためのみならず、自分が世に出るための事業にも忙しかったので、1895年から1901年までの間は金石・経史に関する著述はほとんど残していない。しかし故郷の淮安から当時新旧文化の集中する上海に出たことは、彼の人生及び学問に大転機をもたらした。その頃から彼の交遊は、上に述べたように、当時の権力者の劉坤一、張之洞、端方などから、梁鼎芬、繆荃孫、沈曾植などの名儒、学者にまで広く及ぶようになった。彼らとの間では、例の『農学報』などの維新事業に関する協力が行われたが、交流の主な内容が金石・古籍など共通する興味をめぐるものにほかならなかったことは興味深い。例えば、上海で名士達とともに古鏡の逸品を鑑賞したときのありさまが、次の文から窺える。

光緒戊戌旅居滬上，識周季悆太守星詒，見所蔵新莽始建国鏡，始見鏡

文中記年號者。又数年，客武昌，於端忠敏公（方）署斎中見襄陽銭氏所蔵熹平鏡，其製造絶異，按以指有声，如中空，始知博古圖所謂夾鏡者，世尚有之，於是好之益篤。歳辛丑，見丹徒劉君鐵雲蔵鏡百餘，既一一施墨，鐵雲復以所蔵墨本重複者盡以畀予。（「古鏡圖録序」、1916年、『羅雪堂先生全集』初編１、163頁）

また、当時の湖北巡撫兼署湖広総督の端方との初対面の状況を記した一節からも彼らの交遊の一側面が窺える。

光緒壬寅，予始見浭陽端忠敏公於武昌官寺，公時新得呉愙斎中丞所蔵石権，出以見示，予摩挲不忍去手。公曰，君何愛之之竺乎。予曰，嬴秦文字在天壌間者，僅泰山十字與琅邪残石為秦刻耳，今琅邪残刻又燬於火，相斯之幾絶，權量文字烏得不為重寶。（「秦金石刻辭序」、1914年、『羅雪堂先生全集』初編１、127頁）

とりわけ端方との金石をはじめとする古文物鑑賞の交遊は、端方が亡くなるまで頻繁に行われていたし、一方では出仕の道について端方に頼るところも多かった。前に触れた農工商総局と『農学報』の関係のほか、1904年、端方が江蘇巡撫に赴任した際、羅振玉に江蘇教育顧問に就任することを要請し、羅振玉はこれを承諾した。1906年、北京で、新しく学部が設立されると、また端方の推薦によって、羅振玉は学部の二等諮議官、参事官、そしてやがて農科大学の初代監督（学長）などとして出仕したのである。

金石学に手を着けると、「学」が必要なだけではなく、「金」も重要であった。ある程度の経済力を持たなければ、金石の実物や拓本を買うことができず、人との交流も困難になる。つまり収集物及び学識・鑑賞力、さらにその上経済力まで持たなければ、名士達の社会において相手にしてもらえず、人の所蔵品も見せてもらえないのである。そして当時の収蔵家たちは概ね当時

の権力者でもあり、したがって金石を通しての交遊は同時に出世の道を開くことにもなった。そのために羅振玉は「金」と「学」の二つの基礎を懸命に築かねばならなかった。要するに、後に北京において五年余りの間に行われた精力的な収集、そして京都におけるその大規模な整理と研究、それらを可能にするための基礎であるところの鑑賞力、経史学の素養、近代的な学問の吸収、そしてまた膨大な収集に必要な経済力などの条件が、四十歳までの上海時代に整えられていたのである。

古文物、古籍或いは古文字学を中心とした分野で高名な羅振玉が農業関係の仕事から出発するのは、奇妙なことに見えるが、しかし彼が雑誌の出版、それも農学を専門としたことは、偶然のなりゆきではなかった。それは広くその時代から見れば、清末の改革、ひいては中国の近代化の多岐にわたる模索の一つであり、また彼個人について見れば、彼の人生・学問・思想と密接に関わる必然の結果であった。務農会と『農学報』に力を絞った上海時代、ちょうど30代におさまるこの10年間こそ、後の生涯の大事業の基礎を築いた、自己形成の重要な第一歩である。

注

(1) 本文と関係する『農学報』についての研究には、次のようなものがある。朱先立「我国第一種専業性科技期刊――『農学報』」・「羅振玉與『農学報』」(『中国科技史料』第７輯・２、1986年４月）；楊直「中国傳統農学與實験農学的重要交匯――就清末『農学叢書』談起」(『農業考古』1984年１期、同年６月）；大川俊隆「上海時代の羅振玉――『農学報』を中心としてーー」(『国際都市上海』、産研叢書１、大阪産業大学産業研究所、1995)。とりわけ大川氏の上記論文はこれまでの『農学報』に関する研究の中で最も詳細なものである。

(2) 史和・姚福申・叶翠娣編『中国近代報刊名録』(福建人民出版社、1991)、熊月之『西学東漸與晩清社会』(上海人民出版社、1994）を参照。

(3) 羅振玉『集蓼編』「尋得清兪曲園太史（樾)、采予札疏中語，入所著「茶香室筆記」中，於是海内多疑予為老宿，不知其時甫弱冠耳」(『羅雪堂先生全集』五編（１)、六頁、台湾大通書局有限公司、1973年)。

(4) 蒋黼・羅振玉の汪康年宛書簡「弟黼準于月之廿七八日坐民船赴滬，弟玉於下月初七八由鎮附輪赴滬，大約均須月半前後方能晤教……新正廿二日」（『汪康年師友書札』3156頁）によって、蒋黼が上海に赴いたのは、新暦の1897年２月28日前後、羅振玉の到着は３月９日前後であることがわかる。『集蓼編』に「丙申（1896年）春至上海」と記されているが、羅氏の記憶違いであろう。

(5) これは当時の関係者達の書簡などから十分窺われる。例えば、蒋黼が汪康年に宛てた書簡：「鄙意欲乞閣下函請張孝帥提創此挙，庶幾天下豪俊聞風興起，未識尊意以為何如？」（1896年12月９日、『汪康年師友書札』2927頁）；張之洞が汪康年の宛てた書簡：「農学會請附賤名，僅捐助銀元五百元，已交匯號。……七月廿日」（同上1672頁）。

(6) 本稿は『農学叢書』第一集、京都大学付属図書館蔵版（１６－Ｉ－Ｆ冊）による。上海図書館編『中国近代期刊篇目匯録』の『農学報』の目次には記述されていない。

(7) 羅振玉の汪康年宛書簡に「江寧学堂之局，碩公言，繆丈懸六百金歳脩相召」（『汪康年師友書札』、3162頁）。

(8) 『集蓼編』「而値八月之変，公出任外吏，頻行遺予書，謂興農一事，朝旨不以為非，若願北来，当言之当道，必加倚重，予意頗動」（11頁）。

(9) 張之洞の「批」文、羅振玉の汪康年宛書簡の後に付られている（『汪康年師友書札』、3164頁）。

(10) 『集蓼編』12頁。

(11) 『集蓼編』「是年秋，……鄂督張文襄公，電邀予總理湖北農務局，以館事不可離，謝之。公不許，且両日三電促行，不得已，乃権将館事託沈文学（紓），擬到鄂面辞」（12頁）。「是年秋」の「是年」は不明であるが、羅継祖の『永豊郷人行年録（羅振玉年譜）』（江蘇人民出版社、1980年）をはじめとする年譜には、それを1900年のこととしている。但し、鄒代鈞の1899年９月30日着の汪康年宛書簡には、「叔蘊已到鄂，並未與晤，訪知現住農務学堂，已将信件送交矣，」（『汪康年師友書札』、2783頁）とあって、「是年秋」は「一八九九年」のことだという。

(12) この点については、浅原達郎の「「熱中」の人――端方伝」（『泉屋博古館紀要』第四巻、一九八七年八月一日）が参考になる。

羅振玉的“新學”與“經世”

錢 鷗

將羅振玉的名字與“新學”並列，猛一看，大概會使不少人感到困惑。

因爲羅振玉的“大家”之名，通常總是跟甲骨、銅器、陶器、明器、書畫、古籍相連，對於二十世紀中國學術文化史上的“四大發現”——殷墟甲骨、敦煌文書、漢晋簡牘、明清大庫史料，他是一個從發現、整理、保存到研究都立有特殊功勞的人物。可以説，近代學術史上没有哪一個學者在與“四大發現”關係之緊密上，能够與羅振玉同日而語。另外，甲午戰後他開始接觸明治學術文化界，1911 年因避辛亥革命僑居日本京都，與以京都大學爲中心的日本東洋學界建立了十分密切的關係，他們的學術交流活動，對創始期的日本新東洋學，中國學以及中國的新國學，都産生了極其重要的影響。辛亥革命（1911）是羅振玉人生及事業的一個轉折點，他從此離開仕途，似乎棄絶“經世”之爲，而重操舊業，專心致志於中國的古典學問。在思想以及政見上，開始脱離時代的主潮，擁君保皇，反對共和。晚年，又一度沾染僞滿洲國以及日本關東軍的泥腥。

羅振玉離世已經半個多世紀了，在後世似是而非，虚實難辨的評價和印象裹，他是一個毁譽參差，褒貶不一的人物，既有衆所周知的“名家”形象，也有令人遺憾的“遺老”側影。而歷史學界却始終對他缺少認真、客觀、全面的研究，尤其在其成爲“名家”“遺老”之前的青壯年時期的事迹，更鮮爲人知。其實，甲午戰争前後的羅振玉，曾經是一個深受維新變法運動的感召，向往新學，積極投身晚清新政改革的時務青年。羅振玉接觸新學的過程，在傳統與現代碰撞中的姿態，以及在晚清社會改革中採取的經世安身的方式，都能一方面爲我們研究這個歷史人物提供更爲全面而立體的眼光，另一方面也不失爲一部良好個案，給我們研究晚清新舊學術的遷移，東西文化的交融，以及整個中國現代化演進的本質，提供多方面啓示。

羅振玉的“新學”與“經世”

鑒於羅振玉研究的基礎至今薄弱，本文採取了較詳細的史料梳理方式，重視史料本身的表現力，盡量挖掘富於啓迪的，新鮮的第一手資料。而真正想追究的問題，又可初步歸爲以下幾點：

(1) 晚清的“新學”勃興、“西學”接受，主要展開在哪些領域？哪些層面？

(2)“維新派”“保守派”“革命派”“反動派”的傳統分析圖式，有怎樣的誤區？

(3) 晚清現代化改革的複雜進程和曲折，反過來可否看作是複數現代化模式的可貴摸索？

(4) 中國知識分子的知識結構改造在一個新舊交替的時代、呈現出哪些值得深思的特徵？

Luo Zhen-yu on “Xinxue” and “Jingshi”

Qian Ou

Key words: modern learning, tradition, modernization, cultural transformation